青葉区地域子育て支援拠点事業　 5か年のまとめ 実施概要

対象事業	青葉区地域子育て支援拠点事業
対象期間	令和3年度～令和7年度(5か年度)
事業の実施者	特定非営利活動法人ワーカーズ・コレクティブ　パレット
	青葉区こども家庭支援課
実施目的	1　今期5か年の事業を振り返り、成果や課題、今後の方向性などを整理します。 2　市民協働事業の実践を通じて経験を蓄積し、その後の市民協働や市民協働事業に活かしていくため、また、当該協働事業の当事者だけでなく、多くの市民等の協働への参加意欲を高めるため、当該評価を公開し、透明性を高めます。
実施時期	令和7年7月
実施について	拠点事業は、区と運営法人との協働により進めています。 毎年度、事業ごとに定めている「目指す拠点の姿」に沿って役割分担し、行動計画を立て、年度末には「振り返りの視点」に沿って取組の振り返りを行いながら事業を進めてきました。また、中間期には「有識者を交えた事業評価」を実施し、事業の運営・管理にフィードバックして拠点運営状況の向上を図っています。 今回は、中間期に行った「有識者を交えた事業評価」にその後の事業振り返りを加え、今期5か年のまとめとしました。 【参考】　拠点の７事業 １　乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供（親子の居場所事業） ２　子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること（子育て相談事業） ３　子育てに関する情報の収集及び提供に関すること（情報収集・提供事業） ４　子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること（ネットワーク事業） ５　子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること（人材育成、活動支援事業） ６　地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること （横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業） ７　子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること（利用者支援事業）

1　親子の居場所事業

<table>
<tr><th rowspan="2">目指す拠点の姿</th><th rowspan="2">（参考）2期目振り返りの課題</th><th colspan="2">自己評価（A～D）</th></tr>
<tr><th>法人</th><th>区</th></tr>
<tr><td>①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。</td><td rowspan="4">・より良いひろば運営となるよう、養育者の声の把握とスタッフ一人ひとりの能力向上に取り組んでいく。
・ひろば利用期間が短くなっている中でも子育ての情報や知恵を伝え、親も子も育ち、就園後も利用できる場となるよう取り組む。</td><td>A</td><td>A</td></tr>
<tr><td>②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。</td><td>B</td><td>B</td></tr>
<tr><td>③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。</td><td>B</td><td>B</td></tr>
<tr><td>④親（養育者）自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。</td><td>B</td><td>A</td></tr>
</table>

評価の理由（法人）

（主なデータ）

利用者数	R１	R２	R３	R４	R５	R6
青葉台	28364	15347	18789	25196	26606	26188
市ケ尾	11802	11802	12987	13774	13258	13081
合計	40166	27149	31776	38970	39864	39269

プレパパプレママ利用者数	R１	R２	R３	R４	R５	R6
青葉台	364	172	246	284	383	278
市ケ尾	40	120	188	249	210	86
合計	404	246	434	533	593	364

父親利用者数

	R１	R２	R３	R４	R５	R6
青葉台	1149	700	908	1362	1738	1416
市ケ尾	445	440	554	568	613	546

０歳児利用者数

l者数	R１	R２	R３	R４	R５	R６
拠点合計	6695	5011	5710	7525	6909	16562
１日平均	27.6	20.6	23.6	31.1	28.2	68.7

新規登録者数	R１	R２	R３	R４	R５	R６
青葉台	1384	734	915	1119	1439	825
市ケ尾	588	425	572	618	740	466
合計	1972	1159	1487	1737	2179	1291

0～2か月の登録者数　R1年度　141名　R2年度　59名　R3年度99名　R4年度108名
外国にルーツのある親子：R2年度413組　R3年度677組　R4年度892組
【拠点利用者アンケート結果】親子でよく利用する場所　公園（平日49%休日82.6%）、商業施設の遊び場（平日18.3%休日62.6%）、地区センター（平日7.9%休日3.6%）、ケアプラザ（平日6.2%休日0.4%）

※0～2か月の登録者については、R6より新システム導入により、数の把握ができなくなったため、0歳児の利用数を掲載。

1　いつでも気軽に安心して訪れることができる場になるよう、コロナ感染拡大状況と両拠点それぞれの利用状況を考慮して、入替制、予約制の時間帯を設けるなど配慮しひろばを開催した。入場人数の制限や館内設備・おもちゃなどを清潔に保ちつつ利用者の安全面と居ごこちの良さを考慮しながら温かい雰囲気になるように努めた。利用者がひろばに求めるものと感じる不安のバランスを図ることが難しかった。不快な思いを持つ利用者には丁寧に対応した。コロナ後、青葉台では1Fの入り口にもう一つ看板を出し「今日のラフール」と題してその日の企画や広場の様子、季節の挨拶など呼びかけの言葉を手書き文字とイラストで日替わりで書いた。エレベーターの中にも広場の様子が分かる写真を掲示した。市ケ尾では外の掲示板を活用するとともに、掲示板付近に立ち止まる人へは可能な限りスタッフから声をかけた。
2　多様な世代、国籍、性別、子育て状況を理解して受け入れ、利用者同士が関わる機会が持てる企画を行うなど配慮した。
3　利用者の数と年齢層の変化から、ひろばの環境設定を見直した。日々親子の声を拾うことでニーズを把握し新たな発想、手段（企画）を取り入れたひろばづくりを行った。
4　コロナ禍では難しさもあったが、養育者が親として育つ場になるような企画を展開し、様々な遊びのなかで子ども同士がふれあいを通し親子ともに育つ場になるように心掛けた。
5　新スタッフへの研修は、OJTを取り入れた。日々の振り返りや研修を行いそれぞれの能力の向上に取り組んだ。
6　就学前までが利用対象であることを周知する機会を作り、3才以上を対象とした企画にも取り組んだ。
☆区の協力を得てマタニティークラス・プレパパプレママクラスで拠点の機能・妊娠期のプログラムを紹介し、産前からラフールを知る機会が増やせた。サテライトの立地条件を生かして行ったプレママちょこっと見学デイの効果が大きい。産後の生活をイメージしてもらうと共に、産後出かける場所として認知してもらうことを目指した。生まれて子が0～2か月の時期に来所した数が増えた。

評価の理由（区）

①コロナ禍であっても利用者が安全に利用することができるよう、拠点とともにひろばの現況について検討した。
　母子健康手帳交付時面接や転入時の諸手続き時、両親教室や乳幼児健診時等、区の様々な場面で拠点を積極的に紹介した。
　親子の居場所等の定例的な開催がないエリアを拠点と共有し、「金曜日はふらっとラフールたちばな台」開設に向け、会場の検討、地区への説明等準備を行った。
②多様な世代・家族構成・外国籍の親子も利用しやすい場となるように、拠点とともに検討した。シングルママのトーク・ふたごみつごタイム等の特定の対象者のイベントに参加できるよう、必要な人に紹介、案内を行った。
　また、利用者のニーズ（専門相談員のいる日等）に合わせて拠点の事業を紹介し、利用につなげた。生活困窮者やひとり親の事業等は区の社会福祉職とも連携して周知を行った。
　子育て支援担当だけでなく、こども家庭係、こどもの権利擁護担当、学校連携・こども担当、保育担当等が拠点について理解を深められるよう見学会を実施した。
③拠点の利用状況やニーズ、意見・アンケート結果等を定例会にて共有した。
④養育者向け講座の内容を拠点と検討、情報提供した。親の育ち支援のため、保健師による健康講話を実施した。また、健康づくり係とも協働で講座を開催した。

☆区で実施しているハローベビークラス終了後に、ラフールサテライト見学会を企画し、妊娠期から訪れる場としての周知・協力を行った。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・コロナ禍が終息したことで、各イベントを企画することができ、多くの利用者の来所につながった。
・子育てひろば等の空白地だったたちばな台において、新たな子育てひろばを開所（週一回開催）したことで、拠点への来所が難しい子育て世代の利用につなげることができた。
（課題）
・土曜日の拠点の利用者が増えているため、開催方法等を工夫する必要がある。
・多様な利用者にとって、安心して気軽に訪れることができるような工夫を一層進めていく必要がある。

振り返りの視点

ア　いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
イ　居場所を訪れる様々な利用者（養育者、子ども、ボランティア等）の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
ウ　多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
エ　養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
オ　把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
カ　子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
キ　子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
ク　養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

２　子育て相談事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D） 法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・引き続き研修や日々の振り返りの場を通じてさらに事業を充実させる。 ・外国籍の方や養育者以外からの相談が増えている。今後も引き続き関係機関とも連携していく。	B	B
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）

延べ相談件数	R１	R２	R３	R4	R5	R6
青葉台	2,992	1,694	2,144	1,791	1,818	1,592
市ケ尾	1,832	1,283	1,478	2,230	1,523	1,523
計	4,824	2,977	3,622	4,021	3,341	3,115

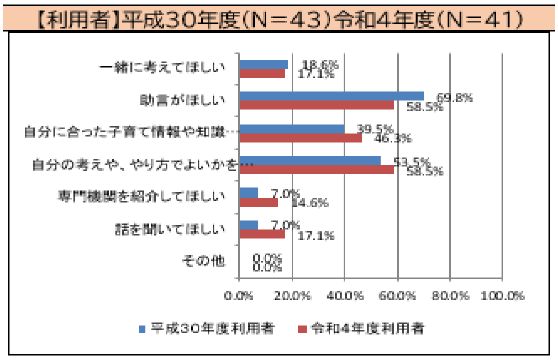
R6相談	親自身	%	生活	%	発育	%	その他	%	計
青葉台	460	29.0	345	22.0	297	19.0	490	30.0	1,592
市ケ尾	516	34.0	318	21.0	278	18.0	392	27.0	1,523

相談年齢		0 歳	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	不明	相談集計
R5	青葉台	734	507	323	145	97	12	1818
	市ケ尾	650	376	240	119	117	15	1523
	合計	1384	883	563	264	214	27	3341

相談年齢		０歳	１歳	２歳	３歳	４歳	不明	プレパパ プレママ	計
Ｒ６	青葉台	563	437	307	132	142	5	6	1,592
	市ヶ尾	599	457	223	135	107	1	1	1,523
	合計	1,162	894	530	267	249	6	7	3,115

スタッフ研修：R3.6「ひろばでの利用者との話の聞き方、話し方、基本姿勢」
R4.3「産前～乳幼児を育てる養育者への寄り添い」
R4.2「コロナ禍における親・子のからだ、こころ」
R5「青葉区分析シートを読み解く」・改訂版「ラフールにおける相談」・情報提供について
R6.7「ひろばでのスタッフ対応について」

【拠点利用者アンケート結果】「助言がほしい」「自分の考えややり方でよいか確認してほしい」と回答した者が多かった。
専門相談員との相談の通訳ボランティア依頼数　４件



１　ラフールHPに相談受付窓口を作り、来所する前に相談予約ができる仕組みを作った。多い人数ではなかったが入り口を増やしたことで、時間外のアプローチを受け入れられるようになった。
２　コロナ禍では、スタッフの研修をオンラインで行うことを基本とし、感染率が落ち着いている時期には参集でも行った。研修では、答えを求める利用者への対応についても学ぶ機会が持てた。
３　R4年度、サテライトの相談者数が増加。全スタッフが両拠点を経験し、環境による話しやすさを工夫することにつなげた。今後も両拠点の特色を生かし、相談しやすさを考え対応する。
４　継続して専門相談員のいる日を両拠点で設置している。相談者が増えている。
５　相談内容によってはチームで対応し、必要に応じて迅速に区や関係機関と連携している。
６　アンケート結果より答えを求めている利用者も多く、ラフールの考えるひろば相談の対応と利用者が求める相談対応に違いがあることが分かった。話したい時に話せる環境を整えていくことで、利用者が思いを吐露し、ともに考える関係を目指していく。

評価の理由（区）

①相談者のニーズや拠点での相談内容の傾向等を拠点と共有しながら、相談しやすい場となるよう検討した。また、拠点との定例会で、事業担当保健師と子育てパートナーが情報共有、意見交換を行うことで、相談状況（内容や実績）や利用者の特徴、拠点で相談することの利点を確認し、拠点で気軽に専門職と相談ができることを区民に周知した。必要に応じて、区で実施している研修を紹介し、スタッフのスキル向上に繋げた。
②拠点での相談状況を共有し、拠点における、よりよい相談対応について検討した。早急な対応が必要な相談があった場合は、迅速な情報提供を依頼し、タイムリーな区の地区担当保健師らによる支援につながった。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・専門相談員への相談件数が増加しているため、開催時間を延長するなどして、多くの利用者が必要な子育て相談を行える環境を整えた。
・相談内容や傾向を区と拠点で適宜共有することで、利用者に寄り添った効果的な対応につなげることができた。
（課題）
・様々な利用者に寄り添った対応を行うため、区と拠点との情報共有の活性化等をさらに行う必要がある。
・利用者に対してより適切な対応が行うことができるように、拠点スタッフ間でコミュニケーションを活発に取ったり、研修を実施していく必要がある。

振り返りの視点

ア　養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
イ　どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
ウ　相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
エ　各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
オ　専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
カ　関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

３ 情報収集･提供事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	必要な情報を養育者一人ひとりや各関係機関に的確に届ける方法について区と拠点が共に具体的に検討していく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約･提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	A
☆乳幼児健診ワクワク情報コーナー（4か月健診）を運営している。		A	A

評価の理由（法人）
（主なデータ） 【拠点利用者アンケート結果】 「欲しい情報が得られる」:利用者H30年度84%→R4年度89%、無作為H30年度76%→R4年度73% 「ラフールのHP、ブログ、Instagram、Facebookを見たことがある」利用者86%、無作為47% 「ラフールで情報の収集と提供の機能について活用している」:支援者H30年度57%→R4年度71% 「情報を得るために利用」:H30年度21%→R4年度32% 「Aonicoアプリを知っている」利用者64%、無作為34%、関係者70.3% 【その他】 ・ラフールHPアクセス数 1期約7,000件／月→2期約10.800件／月 ・ラフールInstagramフォロワー数 1977人（R7年4月） インスタグラムページビュー数 40,679件／月 ・Aonico登録者数4519人 2024年度Aonicoアクセス数 88,292件／月、ラフールが地域の子育て情報を収集、発信する「地域の子育てイベント」コーナーの年間発信数7,708件(2024年度) 情報発信数 約2,600件(2025年6月時点） ・ラフールニュース月平均発行部数:現在4,500部 配架先：2期約210か所→現在260か所 横浜市PRボックス18か所・商業施設、医療機関10か所配架 ・青葉区子育て情報発信デイ＆ラフールminiひろば＠青葉台東急スクエアアトリウム（R6年） 172名 ・4か月健診ワクワク情報コーナー利用者 年間400名（R6）

1　コロナ禍で家から出られない・交流ができないなど、未曽有の社会状況の中でも、養育者や担い手が情報を入手しやすいように、従来の紙媒体の「手渡し」を基本にしつつも、新しい情報収集・発信手段を導入した。そのひとつとして区とともに新たに導入した子育て応援アプリ『Aonico』は、効果的な手法となった。
区内70か所に配架していた子育て情報ファイルをWEB化し、ホームページからいつでも子育て情報が見られるようになった。区内の子育て資源が一目で見られる子育てワクワクマップを作成した。Instagramは年々フォロワーが増え、令和7年7月現在、1か月で10万回を超えるページ閲覧数を得られている。
2　養育者や担い手が必要としている情報ニーズをネットワークやひろば相談など様々な機会に捉えることができた。
コロナ禍の大きな課題は、地域の子育て支援会場情報の開催可否をタイムリーに伝えられることであった。Aonicoの運営により、地域の施設や支援者が、ラフールに情報を届けると、養育者に伝わると認識してもらえたことは大きな成果である。常に周知依頼を受け、アプリやラフールのSNS、ホームページで発信している。
地域からの子育て情報を収集し、青葉区子育て応援アプリ『Aonico』では5,000名近くの登録者へ毎月「地域の子育てイベント」を年間約5,000件発信した。
3　横浜市PRボックス、店舗店頭、小児科医を活用してラフールニュース、リーフレットの配架を行った。ハマハグの登録店募集も、地域での情報配架につながっている。
4．区内の大規模商業施設内、区役所での青葉区民まつりの2か所で子育ての現状と子育て支援情報発信企画を実施した。広く区民に子育て応援団となってもらうための広報の場として今後も計画していく。
5　ラフールニュースやホームページで養育者自らが記事を考え、取材を行い発信する体制を作り、養育者自身が同じ子育て世代へ伝えたいメッセージを発信した。
6　青葉台・市ケ尾両拠点内の情報コーナーを整備し、どちらの拠点でも利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるように工夫した。また、ひろば内の情報配架、利用者への情報提供についてスタッフ研修でも取り組んでいる。
7　保育園にアンケートを実施して各園の子育て支援情報や親子へのメッセージを収集し、必要な利用者へ提供・発信を行った。
☆区とともにワクワク情報コーナーの運営を継続した。ラフールの紹介、地域情報の提供、健診の待ち時間の絵本読み聞かせや手遊びも実施して、4か月児健診に来る親子の不安や緊張をほぐす役割も担った。

評価の理由（区）

①区が把握している子育て関連情報については、拠点との定例会等を通して提供・共有を行った。地域の情報を集約できるよう、青葉区独自での子育て情報発信アプリ『Aonico』を立ち上げ、赤ちゃん教室や乳幼児健診や窓口業務の中で、区民に対して『Aonico』やラフールのSNSの周知を実施してきた。『Aonico』の終了に伴い、情報発信の方法についても区・ラフールで検討や状況の共有を行い、ラフールホームページの拡充という方向性を決定した。また、子育て支援ネットワーク連絡会を通して、ラフールに情報が集約されるよう、呼びかけを行った。
②ラフールに青葉区の子育て情報が集約されていることについて、転入者面談や、母子手帳面接、乳幼児健診、個別支援の場で周知した。青葉区役所に来た親子が、サテライトの情報コーナーに立ち寄れるよう、個別に声をかけ、乳幼児健診の案内にサテライトのチラシを入れる等、対応した。
区報などを通して、幅広い区民に対してもラフールの機能について周知した。子育て情報ファイルWEB版「子育て情報～Basic～」や「ワクワクMAP」の更新について、定例会等を通じて検討、内容の共有を行った。
③SNS掲載用に、赤ちゃん教室や子育て支援者の取材協力を行った。こんにちは赤ちゃん訪問員や主任児童委員から『Aonico』をすすめてもらうよう、情報提供を実施した。乳幼児健診の取材に協力し、健診の流れや、相談できること、健診の意味についてラフールから情報を発信してもらった。

☆乳幼児健診時にワクワク情報コーナーを利用するよう、孤立化が心配される親子（転入者、家族支援が少ない等）に対しては特に、積極的に案内した。

拠点事業としての成果と課題
（成果） ・子育て情報発信アプリ『Aonico』の導入により、拠点に情報を集約し、子育て世代へ発信する仕組みを整えることができた。 ・WEB上での広報以外にも紙面での広報も需要があるので、利用者にあわせた広報媒体を選択し、実施することができた。 （課題） ・拡充した拠点のホームページについて、広報を進めていく必要がある。 ・情報発信の手段について、子育て世代に合ったものを模索していく必要がある。

振り返りの視点

ア　養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
イ　来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
ウ　利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
エ　ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
オ　様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
カ　養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
キ　情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4　ネットワーク事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・各地区内のネットワークの状況を区と拠点で把握し、そのネットワークを今後どのように展開していくかを検討していく。	B	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	B
☆青葉区独自の特性を踏まえ、出張子育て相談ひろばを開催し、子育てニーズの把握及び、地域での子育て支援におけるネットワークの強化を働きかけている。		A	A
☆子育てサークル間のネットワークを構築・推進し、子育てサークルによる活動の支援を行っている。		A	B

評価の理由（法人）

（主なデータ）
・地区別ネットワーク連絡会；R3開催全地区出席。事務局４地区・R4全地区出席　事務局７地区　R5全地区出席予定　事務局全地区　R6全地区出席　事務局全地区
・R2支援者向け通信創刊、年３回発行　R3年２回発行、R4年２回発行　R5年２回発行　R6年2回発行
・アウトリーチのひろば開催　R37か所　R4 ６か所　R5 ８か所　R6　８か所
・あおば広場会議（区内つどいの広場5カ所との会議）R3 ４回　R4 ３回、R5 3回　R6 3回　毎年１回全体研修
・関係機関との会議出席　R3 11回　R4 19回 R5 18回　R6　13回
・一時保育一時預かりを考える会開催　R3 13園参加　R4 12園参加　R5 15園参加
・「おさんぽde絵本スタンプラリー2024」協力37施設；青葉区役所　親と子のつどいの広場（5カ所）地区センター（5カ所）コミュニティハウス（８カ所）地域ケアプラザ（２か所）山内図書館、男女共同参画センターあざみ野、おもちゃ文庫、おもちゃのひろば、美しが丘ログハウス、市民図書室（5カ所）ポケットライブラリー、文庫（3カ所）
・「ひろばde紹介」区内で親子が過ごせる場、人を紹介
関係者へのアンケート結果より
・「ネットワークは、子育て支援に関わっている人たちがつながり、子育ての輪を広げるための機能です。その一員として関わりがありますか?」の問いに対し「関わっている」と回答した者の割合が増加した。関わって行きたい（知っていたが関わっていない＋知らなかったが関わっていない）35. 4%→32. 6%
・「ひろばを地域の親子に紹介していますか？」の問いに対し「紹介している」と回答した者の割合が増加した。80.0%→87.1%
・「子育て相談はひろばや相談室で子育て期の心配事など気軽に相談できる機能です。地域の親子に紹介していますか？」の問いに対し紹介していると回答した者の割合が増加した。80.8%→83.2%

1　コロナの影響で地区別子育てネットワーク連絡会は、オンラインや人数を限っての開催となった。その中で聞かれる課題について区と共有し、ラフールのHPやSNSでの発信と共に青葉区子育て応援アプリ『Aonico』作成に向け当事者の意見集約など協力した。R4年３月にリリースした『Aonico』に掲載する情報をラフールに届けてもらうためにネットワークを駆使して依頼した。コロナがあけて顔を合わせての交流が復活し、コロナ禍の子育てを経験した親子の課題を共有した。それぞれの地区で特色ある活動が行われ、それを後押しすることができた。地区別ネットワーク連絡会に参加していない関係者との連携をシールラリーなどの企画を通して行った。
2　支援者向け通信を創刊した。コロナ禍で会えない中、支援者を紹介したり、ラフールの活動状況を共有したりすることで、支援者同士がつながることを目指した。定期刊行物としてコミュニケーションツールになっている。顔を合わせて交流ができるようになったが、年に数回は定期的に発行を続けた。青葉区での新たな支援活動などの紹介を行った。
3　コロナ禍で両拠点から遠い地区、資源の少ないところ、利用者が少ないひろばに出かけて拠点のひろばを開催した。支援会場の周知、支援者と利用者が出会う場、ラフールの役割を紹介する場として有効であった。令和7年度は親子の居場所のない空白エリアや新しく居場所を作ったところに年間14か所出かけている。
4　一時保育一時預かりを考える会を開催し、一時保育、一時預かりの目的、重要性を共有できた。ラフールからは、各事業所に利用を希望する当事者の声を伝えた。具体的な預かりの対応、工夫について話し合い、今後連携していくことの必要性についても共有できた。一時保育を始めたいと希望していた園に、意義、工夫、課題を伝え、実現に向けてのイメージを持ってもらえた。
5　「おさんぽde絵本スタンプラリー」はコロナ禍で休止していたが、令和４年より再開した。絵本をツールとして、親子にいろいろな場所へ出かける機会の提供と、施設との顔の見える関係を作ることが目的である。身近な支援施設と利用者をつなぐ機会としての意義がある。現在「おさんぽde絵本シールラリー」として参加施設を増やして目的を果たしている。
6「ひろばde紹介」（旧名称「ひろばゲスト」）は、地域で活動している人、施設をひろばに招き、地域で多くの人が子育てを見守っていることを伝えている。その様子を動画撮影し、ひろばに来ることができない人に向けてもホームページ、Instagramで発信した。
7　ラフールの事業の周知が、地域の支援者を通して広まるように主任児童委員定例会、子育て支援者定例会、公私合同保育園長会などの機会を求めて行っている。
【拠点利用者アンケート結果】子育てサポートシステムと子育てパートナーを地域の親子に紹介しているとの回答が増加していないことが分かった。どちらも「知らなかったが紹介していきたい」とする回答は増えている。アプローチの不足している相手を見極めて周知協力につなげていく。

評価の理由（区）

①青葉区子育て支援ネットワーク連絡会事務局では、地区別連絡会の状況を共有しながら、課題解決や次年度の研修会の検討を行った。地区別子育て支援ネットワーク連絡会の事務局として、地域ケアプラザとともに連絡会の運営を共同で行った。拠点を中心に、地域の支援者同士が顔見知りの関係性を築きながら、ネットワークがより強化なものになるよう務めた。
また、区全域及び地区のデータ分析を通して、各地区の特徴や課題整理に取り組んだ。
②地区別子育て支援ネットワーク連絡会の場で、拠点に地域の情報を届けるよう呼びかけ、情報集約することで、拠点に来た親子を地域につなげることができた。

☆サークルリーダー交流会に参加し、子育て支援者によるサークル支援について情報提供を行った。区と拠点でサークルの現状について共有し、今後のサークル活動支援について子育て支援担当で話し合った。

☆出張子育て相談ひろばの開催場所は、地域課題を踏まえ拠点と共に選定した。実施時間や内容の拡充も図った。また、ひろばの周知を行うとともに、地区担当保健師が同行し、運営へ協力した。あわせて、公園で実施するため、土木事務所へ申請する際に必要な副申書の発行を行った。

様式１－４　地域子育て支援拠点事業評価シート

拠点事業としての成果と課題
（成果） ・拠点も地区別子育て支援ネットワーク連絡会の事務局を担うことで、支援者同士のつながり作りをさらに強化することができ、地域での課題解決に向けて検討を深めることができた。 ・区内の様々な場所で出張子育て相談ひろばを実施することで、拠点に来所が難しい子育て世代への拠点事業等のアプローチにつなげることができた。 ・サークルリーダー交流会等を通じて、サークル支援を積極的に行うことができた。 （課題） ・地区別子育て支援ネットワーク連絡会を通じて、青葉区全体の情報だけでなく、各地区内での情報共有がスムーズになるように取り組む必要がある。 ・出張子育て相談ひろばの実施結果等を踏まえ、開催場所やコンテンツ、周知方法等について検討を行う必要がある。 ・各サークルの課題等に対して寄り添い、継続した支援を実施していく必要がある。

振り返りの視点

ア　地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

イ　地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

ウ　子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。

エ　養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

５　人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・子育て世代以外への理解は、他拠点事業と共に連携しながら発展させていく。 ・シニア層はじめ、様々な世代の区民が子育て支援に関心を持てるように工夫して働きかけていく。	A	B
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）
◯支援者向け
①研修：R2年「発達障がいへの理解と保護者支援」（オンライン）70名程度参加　R3年「産前～乳幼児期を育てる養育者への寄り添い」53名参加　R4年２回開催「アレルギーを気にする親子への接し方」（オンライン）47名参加「配慮が必要な子を持つ養育者への対応」（オンライン）45名参加　　R5年２回開催「預かり新制度についての説明会」（ハイブリッド）25名参加「産後の変化について」（ハイブリッド）49名参加　R6年2回開催「育てにくさを感じている保護者への寄り添い①」（ハイブリッド）49名「育てにくさを感じている保護者への寄り添い②」35名
②講座：R3年「オンラインひろば　予約制のひろばを開催しよう」６名参加
◯区民向け・祖父母向け
①講座　R3年：区民向け講座「震災から10年、災害時の心構え」3名　「孫まご講座」5名　R4年「地域でつながる子育ち」（ハイブリッド）会場９名オンライン23件　「防災講座　地域における被害想定・基本的な災害への備え・風水害への備え」3名　R5年「青葉区子育て情報発信デイ＆miniひろば親子21組区民多数　R6年「青葉区子育て情報発信デイ＆ラフールminiひろば　親子61組区民20名　区民講座「防災」14家庭18名　孫まご講座16名
◯パパプレパパに向けた企画　R2年両拠点月1回プレパパプレママの子育てプチ体験開始（現在も続く）　パパ講座R3年「体を使って子どもと遊ぼう＆ワークライフバランス」2組参加　R4年「子育てはじめの一歩」5組参加「幸せ家族のはじめの一歩　みんなで語ろう！繋がろう！」2組参加「幸せ家族の土台の作り方」5組参加　R5年度「パパ講座」11組参加「パパのおしゃべり会」4組参加　R6年「パパ講座」９組参加
◯ボランティア活動・学生（論文・研究・実習生）の受け入れ　R2年延べ75回　R3年活動は中止、レポート実習84名対応　R4年延べ87回　R5年129回　R6年108回
【拠点利用者アンケート結果】ボランティア登録ができることを知っている人（すでに登録している+知っていたが登録していない）が22.5%→9.3%と大きく減った。一方で「ちょこっとお手伝い」をやってみたいとする人は23.4%で少なくない。

1　R2年度5月いっぱいまで感染症拡大防止のためひろばを閉室し、人材育成に関する参集企画やひろばでの活動は中止した。地域で活動する支援者や子育てサークルには電話やメール等で相談を受け、感染拡大状況の中で何ができるか一緒に模索した。集まらずにできることを情報事業・ネットワーク事業と連携し模索することで支援者とのつながりを深め、オンライン研修の回数増加や延べ参加者の増加がみられた。コロナあけは、オンラインの参加しやすさと顔の見える参集のどちらか選べるハイブリッド形式の研修に切り替えて開催している。
2　祖父母世代向けの企画は、祖父母世代も含めた広く区民に向けた企画とした。これまで主にひろばの環境整備を依頼していたシニアボランティアの活動の場を広げている。青葉台東急スクエアアトリウムでの情報発信デイ、公園企画などで見守りボランティアを依頼するなどシニアボランティアの活動で「地域での子育て」を広く呼び掛けていく。
3　パパプレパパの来所と交流促進を意識し、R3年度から「パパと遊ぼう」「パパ・プレパパ座談会」を毎月開催。「プレパパプレママの子育てプチ体験」はInstagramでも発信し、拠点につながりのなかった妊娠期の夫婦が拠点を訪れるきっかけとなっている。感染拡大防止に配慮した定員で行い、定員を越えた時は臨時開催等で対応。他の妊娠期向け企画と合わせて区とも連携し周知することで、参加者の増加、企画の定着がなされている。テレワークの普及や育児休暇の取得等もあり、パパプレパパの来所は土曜日に限らず増加している。パパとプレパパが交流する機会や学びの機会（パパ講座）を年々増やしている。
4　ひろば休止中に絵本の貸出を始めたことから、利用者が貸し出し絵本を毎月選定する絵本ボランティア活動が生まれた。ラフール（青葉台）が10周年を迎え、演奏ボランティアに声を掛けてコンサートを計画したが、８月に実施することは難しく、11月と3月に実施した。時期や開催形式を工夫をすることで、人材育成に関わる企画や活動の実施を目指した。学生の実習や職業体験はR2年度から中止となっていたがR4年度から受け入れを再開。小学生・中学生・高校生・大学生・専門学校生などあらゆる学生を、実習や職業体験、ボランティア等で受け入れるほか、「ふれあい授業」として次世代に子育て家庭への理解を深めてもらう企画も始め、利用者の活躍の場も作っている。

評価の理由（区）

①支援者や区民向けの研修実施に対し、チラシの配布や広報等での対象者への周知や、他機関との調整等の協力を行い、子育ての現状や支援のあり方を共有できるようにした。実施している研修内容についての共有を依頼した。
②③地域全体で子育て家庭を見守る地域づくりに向けて、『地区別子育て支援ネットワーク連絡会』を拠点と共に開催し、地域活動や地域課題を参加者と共に共有し、解決策を検討した。
　地域のイベントで『あおば子育て応援団』のストラップを配布し、子育て支援の啓発を行った。
④ハローベビークラスの参加者へ、事業終了後にラフールツアーを案内した。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・コロナ禍を経て対面のみでなくオンラインを併用したり、開催時間やテーマを工夫することで、研修会の参加者を増やすことでができた。
・様々な学校等と連携を行ったことで、これから子育て当事者となる小学生・中学生・高校生・大学生・専門学校生など多くの学生に向けて、ボランティア体験や実習・職業体験を行う機会を増やすことができた。

（課題）
・より多くの学校等と連携を深めるため、実際に学校へ出向くなど、これから子育て当事者となる学生に向け学びの機会を拡充していく必要がある。

振り返りの視点

ア　地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
イ　子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
ウ　地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
エ　養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
オ　活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
カ　子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
キ　子育て家庭（妊娠期の方を含む）を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
ク　これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

６　横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D） 法人	自己評価（A～D） 区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・子育て支援に理解のある提供会員数を増やす取組が継続的に必要 ・ますます多様化してくる預かりの仕組みの中で、利用者の要求度が増し、提供会員のスキルも求められている。緊急時の依頼をいつまでどこまで受け、次の支援につないでいくのかを区と拠点で考えていく。	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		B	B
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		B	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）

	R1 年度	R2 年度	R3 年度	R4 年度	R5 年度	R6 年度
援助活動依頼件数	213 件	112 件	131 件	155 件	304 件	402 件
活動件数	8,239 件	3,357 件	3,786 件	3,497 件	6,141 件	10,012 件
実活動利用会員数	228人	145人	177人	185人	251人	359人
登録利用会員数	760 人	670 人	718 人	802 人	1,005 人	1,112 人
実活動提供会員数	128人	92人	107人	112人	147人	104人
登録提供･両方会員数	266 人	233 人	245 人	280 人	311 人	385 人

		R1 年度	R2 年度	R3 年度	R4 年度	R5 年度	R6 年度
通常の入会説明会開催数		31回	23回	48回	53回	70回	54回
個別入会説明会開催数		78回	67回	43回	36回	64回	70回
出張入会説明会開催数		3回	2回	5回	3回	7回	4回
参加者数	利用会員希望	317人	188人	278人	316人	517人	389人
	提供会員希望	25人	22人	63人	49人	122人	93人
	両方会員希望	7人	0人	5人	14人	29人	20人
	その他	2人	0人	0人	0人	0人	0人
	合計	351人	210人	346人	379人	668人	502人

□援助内容（活動件数Ｒ２年度上位順）	Ｒ１年度		Ｒ２年度		Ｒ３年度		Ｒ４年度		Ｒ５年度		Ｒ６年度	
	利用人数	活動件数	利用人数	活動件数	利用人数	活動件数	利用人数	活動件数	利用人数	活動件数	利用人数	活動件数
１．利用会員宅預かり	74人	1,709件	46人	863件	78人	1,180件	89人	1,147件	136人	2,303件	**134人**	**3,587件**
２．習い事・塾の送迎	50人	1,218件	21人	335件	22人	414件	20人	539件	26人	479件	45人	1,163件
３．幼稚園・保育園の送り	30人	1,121件	26人	376件	19人	449件	16人	256件	19人	482件	30人	892件
４．幼稚園・保育園の迎え	35人	1,100件	27人	522件	36人	602件	23人	446件	34人	720件	45人	1,299件
５．幼稚園・保育園の迎えと帰宅後の預かり	32人	907件	16人	234件	17人	222件	19人	239件	35人	622件	55人	969件

【拠点利用者アンケート結果】認知度　「利用している」H30年度5.0%、R4年度8.8%　「知っていたが利用していない」H30年度57.5%、R4年度68.6%　（理由全体の中の割合：不要40%･不安20%･面倒17%）
会員アンケート：事前打合せは安心につながる。利用会員：R1年度100%、R4年度100%、提供･両方会員：R1年度96.1%、R4年度95.7%。
活動がない理由をどう考えるか。（当該年度に援助活動をしていない提供･両方会員への質問項目）「依頼が来ない」R1年度32.1%、R4年度57.4%。「希望する活動と依頼の条件が合わない」R1年度46.4%、R4年度42.6%。

1　多くの区民が参画するために、定期的に入会説明会を開催した。
利用会員希望者は、体調不良など個別対応が必要な際は利用会員希望者宅への出張も行った。会員登録が入会説明会参加時にできるように早くなったことで、必要な人がすぐに利用できるようになった。
提供会員募集は、小中学校保護者へのチラシ配布･区報による周知、入会説明会、予定者研修の追加開催と連続性を持たせることで多くの参加者が得られた。
支援者に対して子育てサポートシステムの周知を行うリーフレットを作成し、主任児童委員連絡会、子育て支援者定例会、青葉ひろば会議、民生委員･児童委員協議会などで養育者への周知の協力を依頼した。ネットワーク連絡会で区内各地域において、子サポの現状について資料を作成し提供会員のさらなる拡大の協力を依頼した。予定者研修は、2024年度からは各区2回開催＋eラーニングと形式が変わったが、きちんとフォローし青葉区内では提供会員が順調に増えている。
2　この5年間で利用料の減額、無料クーポンの導入、システム化、など利用を希望する人が多くなっている。保護者の常勤を理由に援助を希望する人に加えてリフレッシュ利用を希望する声が増えた。提供会員の増加もあって、ほとんど断ることなくコーディネートが進められている。

3　コロナ禍で援助活動が縮小、会員間の交流会が実施できなかった時期があったが、援助活動は広がり、全体研修会、交流会、提供・両方会員研修交流会を実施することができている。日頃個々に行っている援助活動で感じるところを他の会員と共有できることは意義がある。独自の研修会以外にも拠点や区で行う研修を案内すると提供会員の積極的な参加を得ることができた。学びとして、区の保健師からの近頃の親子の生活や子育てについての話を取り入れた。安全安心に子どもを預かることができるように、また、利用会員が安心して預けられるようにさらに研修を有効なものにしていく。
4　日々援助活動のフォロー電話を利用会員、提供会員双方に対して行っている。会員同士直接言葉にできないことも聞きながら、無理のない活動の実現を目指すことは会員同士だけでなく、コーディネーターへの信頼を深めることにもつながっている。引き続き区支部通信の発行、アンケート結果のフィードバックでも会員のフォローをしていく。
5　子育てパートナーと連携して、子育てサポートシステムでの支援を行っていくとともに、子サポ以外のサポートの情報、たとえば移動情報センターや産前産後ヘルパーなどを利用会員に提供している。
6　区から依頼のある配慮の必要な家庭へのサポートにも対応をしているが、その件数が少なくない。一般の市民を担い手とする活動で、こうした依頼にどう応えていくか、まだ結論は出ていない。

評価の理由（区）

〇提供会員を増やす取り組みとして、毎年区の広報に提供会員募集の記事を掲載した。また、主任児童委員連絡会や地区別子育て支援ネットワーク連絡会で地区の充足率等現状を報告し理解が深まるよう努めた。
〇母子健康手帳交付面接時や家庭訪問、区主催の事業等で、適宜周知を行った。
〇提供会員向け研修会に参加し、青葉区の子育ての現状を伝え、区の保健師の役割、提供会員の役割を共有することができた。
〇利用相談があった場合には、地区担当保健師が丁寧に親子と事務局とのつなぎを行った。特別なニーズや配慮が必要な時は、コーディネーターと連携しながら調整を行った。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・提供会員を増やす取組として、広報よこはまでの周知等を積極的に行うことで、子育て世代が必要な時に利用しやすい事業とすることができた。
・様々なタイミングで制度の周知を行うことができ、子育て世代へ利用を促すことができた。

（課題）
・利用会員の希望者が増加しており、入会説明会の回数や実施方法等について検討する必要がある。
・地区によっては提供会員と利用会員の人数に乖離があり、その差を埋めるための取組を行う必要がある。
・子育てサポートシステムの制度について、区の職員が適切な案内ができるように、より理解を深める取組を行う必要がある。

振り返りの視点

ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。
エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。
オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。
カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。
キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。
ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか（新たな事業の実施や事業の見直しなど）
コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。
サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

７　利用者支援事業

<table>
<tr><th rowspan="2">目指す拠点の姿</th><th rowspan="2">（参考）1期目振り返りの課題</th><th colspan="2">自己評価（A～D）</th></tr>
<tr><th>法人</th><th>区</th></tr>
<tr><td>①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。</td><td rowspan="3">・子育て世代の相談窓口としてより広く認知・活用されるようにしていく。
・関係機関や支援者とのネットワークを構築し、連携を深めていく。
・相談内容の分析により、区特有の課題を明らかにし事業の展開を検討する。</td><td>B</td><td>B</td></tr>
<tr><td>②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。</td><td>A</td><td>A</td></tr>
<tr><td>③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。</td><td>B</td><td>B</td></tr>
</table>

評価の理由（法人）

（主なデータ）

相談者数	R1	R2	R3	R4	R5	R6
青葉台	358	172	289	291	542	427
市ケ尾	227	147	219	260	228	232
計	585	319	508	551	770	659

相談内容のべ数	R1	R2	R3	R4	R5	R6
青葉台	995	444	668	500	1,007	965
市ケ尾	436	239	362	579	327	429
計	1,431	683	1,030	1,079	1,334	1,394

R6相談項目内訳

	親自身	%	生活	%	その他	%	計
青葉台	336	34.8	118	12.2	511	53.0	965
市ケ尾	86	20.0	52	12.2	291	67.8	429
計	422	30.3	170	12.2	802	57.5	1,394

・市ケ尾相談項目その他40.8%の内訳(全体比)
子どもと家庭10.4%・制度・サービス7.8%・就園就学7.4%・子どものしつけ3.8%

【拠点利用者アンケート結果】
・パートナーを知っている：H30年度39.2%→R4年度：43.8%
・利用しているH30年度0.0%、R4年度16.1%

1　日頃よりひろばや出張先で親子と接することで、パートナーに気軽に相談できるよう心掛けた。加えてひろばスタッフとの連携で、相談者をパートナーにつなげてもらうこと、パートナーは施設長らとチームで判断、対応をすることで、適切な情報提供や支援機関の紹介につなげた。
2　コロナ禍で地域訪問などできない期間が長く、拠点外での子育て世代のニーズ、地域の状況や課題を関係機関と共有することが難しかったが、コロナがあけ訪問を控えていた医療関係施設、保育施設への訪問を再開。分娩や妊婦検診を扱う産婦人科と認可外保育施設へ連絡を取り、拠点事業の周知と施設からの情報提供など情報交換を行い、互いを知る良い機会となった。産婦人科へは妊娠期の拠点企画も併せて周知し、待合室へリーフレットや拠点カードを設置してもらうことができた。認可外保育施設からはラフールが行っている保育施設へのアンケートに回答をもらったり、施設の資料を提供してくれたりするところもあった。地域で子育て支援をしている関係者から電話相談や情報提供依頼を受けるほか、年に数回、出張相談に出向くようになった。ひろば対象年齢外となった小学生の養育者や関係機関からも相談があり、身近な相談場所と認知されてきた。まだまだ認知が十分でない現状を踏まえて、区と協力して子育てパートナーは、どんなことができるのかわかりやすく伝える区報特集記事を掲載した。これを持って関係各所を回るなど、地域の支援者を通した広報をさらに進めていく。
3　ひろばでの利用者との何気ないやり取りを通し、相談者に寄り添い信頼を得た。丁寧な聞き取りをすることで、養育者自身が解決の糸口を見つけられるよう、主体性を尊重した。内容に応じてチームで相談者に向き合い、複数の選択肢を示し情報提供を行うことで自己決定できることを目指した。

4 多様な親子に向けた企画に協力を得ている関係機関と丁寧な振り返りを行っている。養育者の声や要望を大切にしながら、関係機関の思いを取り入れ目的、対象者、内容などを共に検討し企画をブラッシュアップした。予約なしで誰もがひろばを利用しながら聞ける『ひろば内子育て講座』と予約制の個別相談をセットにした地域療育センターとの企画は、両拠点で年間2回ずつテーマを変えて行うことで多くの親子の参加を得られた。講座後の個別相談で子どもをそばで見ながら地域療育センターのSWやOTと話せることも好評。
また、母子保健コーディネーターと連携して行う妊娠期の企画『妊娠期向け 赤ちゃんを迎える準備会』を青葉台で実施。（市ケ尾は区開催の「ハローベビークラス」から「プレママちょこっと見学デイ」へラフールスタッフとともに母子保健コーディネーターが引率している企画と、「プレパパプレママの子育てプチ体験＆先輩家族との座談会」を引き続き行った。）沐浴体験はもともと要望が高く、それを求めて参加があるが、併せてすごろくで地域資源を知れたことが予想以上に好評を得ている。
5 利用者支援事業に限らず、青葉台の拠点の構造上、エレベーターで6階まで上がって拠点を利用することにハードルを感じる利用者に対して、外の看板にもうひとつ看板を加え、手書きでその日のひろばのお知らせや呼びかけのことば、イラストなどを描いたものを設置。エレベーターの中にも広場の様子がイメージできる写真を配したボードを掲示した。

評価の理由（区）

①妊娠期からの利用につながるように、関係機関の連絡会で子育てパートナーの周知を行い、区報でも利用者支援事業の記事を掲載した。また、ハローベビークラス事業参加者を対象に、ラフール見学ツアーに案内するなど、妊娠期から利用者が拠点に足を運び、子育てパートナーにつながる仕掛けづくりを行った。
②毎月、定例会にて支援方針や役割の確認を行った。行政の制度や事業など相談に必要な情報を提供した。
③拠点と区が適宜連携し、関係機関や地域の社会資源との良好な関係性を築いた。子育てパートナーが地域の子育てひろば等でも活躍できる機会が作れるよう、ネットワークを強化した。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・コロナ禍が終息したことで、利用者支援事業の周知や連携をより多くの関係機関と実施することができた。
・定例会等を通じて、区と拠点で相談内容や支援方針を共有することで、相談者に寄り添った適切な対応を行うことができた。
・産婦人科や区の事業等を通じて、妊婦に対して利用者支援事業の内容を周知したことで、妊娠期からの利用につなげることができた。
（課題）
・より妊娠期からの利用につながるように関係機関との連携を強めていく必要がある。
・気軽に相談できる子育てパートナーについて、区民への周知を強化する必要がある。

振り返りの視点

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。

協働事業プロセス相互検証シート

１　事業計画段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・目指す姿を共有して、良い関係で協働事業を進めている。
・実施事業の計画が変更となった時に、お互いですり合わせができなかった。

【今後改善が必要と思われること】

・お互いの役割をよく理解した上で事業を計画し、修正があった時には丁寧に説明しあい、方針の見直しを行う。

２　事業実施段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・お互いの強みや得意分野を、どう生かし合えるかを考え、提案しながら取り組むことができた。
・事業の計画段階から一緒に行い、目的達成のために一緒に動くことができた。

【今後改善が必要と思われること】

・事業の進捗に応じて、目標、ニーズ、対象、実施方法などをふりかえり、修正しながら取り組む。
・事業実施段階においても、事業終了後の見通しについて、話しながら取り組むよう進めていく。

３　事業の振り返り段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・アンケート調査や話し合いによって事業の振り返りを行うことで、課題を共有し、今後の方針を確認することができ、次の事業計画へ反映できた。

【今後改善が必要と思われること】

・今後も区と拠点で意見交換を行う、役割分担しながら効果的に事業を進めていく。
・単年度の振り返りに合わせて、第３期の振り返りも行うようにする。